

# SHOW HEY シネマルーム

## Data

監督：塩屋俊  
撮影：阪本善尚  
原案：青葉薫  
脚本：石川勝己、三浦千秋  
出演：陣内孝則 / 田中麗奈 / 吉沢悠  
/ 柄本明 / 永島敏行 / 石丸謙二郎 / 寺泉憲 / 中村ゆり / 林美智子

## 種まく旅人～みのりの茶～

2011年・日本映画  
配給 / ゴー・シネマ・121分

2012 (平成24) 年2月14日鑑賞

宣伝用DVD鑑賞

## 👁️👁️ みどころ

『0 (ゼロ) からの風』(07年) 『ふたたび-SWING ME AGAIN-』(10年) で社会問題に鋭く切り込んだ塩屋俊監督が、農業問題について「ちょっといいお話」をソフトかつ温かい視点から映画に。

化学肥料や農薬が当たり前の時代に、なぜお茶の有機栽培を？都会に馴れたお嬢さんに田舎暮らしはもとより、害虫駆除に汗を流すことができるの？風来坊の金ちゃんのような脱藩官僚がホントにいるの？そんなこんなの「夢」も、映画ならふんわりと実現可能！

さて「新しい価値観、豊かな生き方」を応援する塩屋監督流「オーガニック映画」のシリーズ化は・・・？

## 塩屋俊監督が、「ちょっといいお話」を映画に！

現在、野田内閣の下でTPPへの参加が大問題となっているが、日本の農業政策のどこに問題があったのか、それをどのように転換していくべきなのかは、ここ二十数年来の大問題。ところが、それに対して歴代内閣は場当たりの、人気取り政策しかとってこなかったため、今や農業の担い手は平均年齢が65.8歳になってしまい、このままでは立ちゆかなくなっている。そんな危機的状況の中、橋下徹大阪市長を中心とする大阪維新の会は、2月13日「船中八策(維新八策)」を発表してTPPへの参加を表明したが、塩屋俊監督は故郷の臼杵を舞台としてお茶にまつわる「ちょっといいお話」を映画化した。

塩屋俊監督は『0 (ゼロ) からの風』(07年)(『シネマルーム15』214頁参照)で、飲酒運転による交通事故の処罰の軽さを社会問題として真正面から取り上げ、『ふたたび-

SWING ME AGAIN - 』(10年)で美しいジャズの音楽に絡めながらハンセン病の問題を取り上げた(『シネマルーム25』92頁参照)が、本作では我が国の農業政策のあり方とかTPPへの参加の是非という形で真正面から切り込むことはせず、ソフトな視点から人情味豊かに農業問題について問題提起をした。本作はヒロイン森川みのり(田中麗奈)の人間としての「成長物語」も兼ねているから、都会での仕事に疲れ故郷へのUターンを考えている若者がいれば、ぜひ彼女の生き方も参考に。

## 中央官僚の生き様あれこれ、風来坊の金ちゃんとは？

昭和30年～40年代の日本国は、政治家も強烈な個性で政治をリードしたが、東大法学部の卒業生を中心とした中央官僚たちも「実務は俺たちが担っている」との自負心で猛烈に仕事をしていた。そこにはいくつかの不正・癒着という弊害もあったが、全体としては彼らの努力によって国や国民を豊かに発展・成長



(c)「種まく旅人～みのりの茶～」製作委員会

させてきた。しかし、今は政治家がダメなら中央官僚もダメ。さらに、中央から地方に向向しているいわゆる出先機関の官僚たちも、地方分権・地域主権の視点から廃止ばかりが叫ばれているから、せっかく難関の国家公務員試験をパスして中央官僚になっても、昔のように先は見えないことになっている。そのため次々と「脱藩官僚」が登場し、マスコミを賑わしているわけだ。

このように今や中央官僚の生き様もあれこれだが、本作(本シリーズ?)の主人公である風来坊の金ちゃんこと農林水産省官房企画官、大宮金次郎(陣内孝則)の生き様は？彼が「風来坊の金ちゃん」と呼ばれるのは、身分を隠して全国各地の農家をまわっては畑仕事を手伝い、酒を酌み交わしているためだが、なぜ彼はそんな生き方を？

## 都会での若者の仕事は？カタカナ職は？

映画冒頭、アパレルメーカーのデザイナーというカッコいい仕事で頑張っている森川みのりの姿が登場する。私たち団塊世代には地方から上京し、大学を卒業して一流企業に就職、そして結婚してマイホームを、という成長物語が1つの理想としてあった。しかし、白杵から上京して1人暮らしをしながら働いているみのりの場合は、デザイナーとして就職できたところまでが上昇気流で、あとは下り坂？だって、今やアパレル業界は中国に押

しに押されているため、みのりが勤めている会社もデザイン部門を中国に発注することになったから、高給取りで役立たず(?)のみのりは体のいいお払い箱?とまでは言わないとしても、ここでみのりが「デザインができないなら私がいる意味はない」とタンカを切ったのはちょっと軽率?さらに、この会社への就職が自分の実力ではなく、父・森川修一(石丸謙二郎)のコネだったことを知ると、みのりは大きく落ち込むことに……。日本経済が低迷を続ける中、都会での若者の就職は大変だし、これまでカッコいいと思っていたデザイナーなどのカタカナ職も実は不安定?

そんなみのりの生き方と対極をなすのが、大分で農園カフェを営んでいる友人の栗原香苗(中村ゆり)。自分のようなしがらみをすべて取っ払い、自由に自分のやりたいことをやり、しかもそれが雑誌に取り上げられる。そんなカッコいい生き方、カッコいい仕事が私の憧れ。みのりはそんな風に香苗のことを褒め称えたが、それに対する香苗の反応は、「おしゃれて楽しいだけの仕事などない!」という厳しいものだった。今ドキの若者は、こんな2人の議論をしっかり受けとめなければ……。

## 有機栽培とは?そのしんどさは?

レストランからの廃油を集めて料理作りに再利用。中国ではそんなぞとすると話が現実起きているらしい。さらに、3・11東日本大震災後は放射能汚染への関心が高まったため、〇〇産産産の表示が大人気。わざわざそんな指摘をしなくても、食の安心・安全は昔から大切なテーマだが、そこで問題は有機栽培にどこまでこだ



(c)「種まく旅人~みのりの茶~」製作委員会

わるか、ということだ。今ドキの子供はキュウリはまっすぐなもの、りんごは真っ赤でつやつやしたもの、キャベツは虫食いのないものが当たり前だが、考えてみればそんなことができるのはすべて化学肥料や農薬のおかげ。有機栽培をやれば、形が曲がったり、色が汚れたり、虫が食っているのはザラにあるはず。しかし、それでは見栄えが悪く商品にならないから、すべて農薬を使って形や大きさまで統一しているわけだ。

本作は、「オーガニック・シネマの誕生!」と銘打たれているだけあって、映画中盤は病気で倒れた祖父・森川修造(柄本明)の代わりに金次郎の指導(?)を得て有機栽培によるお茶づくりに悪戦苦闘するみのりの姿が描かれるのでそれに注目!

## 地に足をつけた選択を!

市役所農政課職員の木村卓司（吉沢悠）も元々は有機栽培派だったようだが、お茶の有機栽培には害虫の駆除や雑草取りの作業が大変。したがって、彼も今は農政課の方針に従って農薬散布の指導などをしていたわけだが、修造は1人で作業できるぎりぎりの面積だという15反の畑を無農薬栽培していたから、それを引き継いだみのりは大変。九州の温かい太陽の下での畑仕事は楽しそう。しかも、有機栽培でお茶作りなんて素敵……。現実にはそんなノーマルな話ではないことをしっかりと確認したい。

東日本大震災後、原発の賛否を問う国民投票の実施を求める運動が高まっているが、ひょっとして農薬だって原発と同じようなもの……。？したがって、農薬を選ぶかそれとも有機栽培を選ぶかについて、本作に見るような地に足をつけた検討が必要なのと同じように、原発の賛否だって、地に足をつけた検討が必要だ。

## 映画ならではのハッピーエンドを温かく！

私は2001年から10年以上弁護士と映画評論家の「2足のわらじ」を履いてきたが、そのおかげで上方芸能の木津川計氏から「本職以外に一流の見識、技芸を備えた人を『文化人』と呼ぶなら、この人こそ本物の文化人であろう」という過分のお褒めの言葉をいただくと共に、『上方芸能』183号（2012年3月）に掲載してい



(c)「種まく旅人～みのりの茶～」製作委員会

ただいた。大宮金次郎が中央官僚から大分県・臼杵市役所の農政局長という地位に向向しても、最後まで木村卓司に自分が農林水産省の官房企画官であることを見破られず、「風来坊の金ちゃん」で通したことは立派なもの。2足のわらじを履き続けることは結構大変なものなのだ。

他方、ひょんなことからお茶の有機栽培に取り組むことになったみのりは作業の大変さの他、地域のおばさんたちとの交流・人間関係も大変。たまたま修造の世話をこまめにしてくれている農家の主婦・衛藤フジエ（林美智子）が親切なおばさんで、みのりの悪戦苦闘ぶりを温かく見守ってくれたからよかったものの、「都会から1人やって来たハデで生意気なお姉ちゃん」と見られたら田舎暮らしはそれだけでたちまちダメ。立派なお茶の収穫に結びつくハッピーエンドは約束ゴト(?)だが、晴れの表章式でみのりが表章状を受け取った相手とは……。？そんなちょっと意外な結末をほほえましく見守りながら、どうもシリーズ化になりそうな塩屋監督流「オーガニック映画」の次作に期待しよう。

2012（平成24）年2月15日記